

2007年9月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

北半球の海面気圧 (SLP) および500 hPa 面高度では、ポーフォート海を除く高緯度域で負偏差、その周辺の中緯度域では正偏差となった。これらの高度場偏差に伴って、北半球のジェットは帯状に北偏し、ユーラシア大陸および北米大陸東部の広範囲で高温となった。一方、ヨーロッパと北米大陸西部では発達したトラフの影響で低温偏差となった。日本付近は、太平洋高気圧の北への張り出しが平年より強く、ジェットが北偏していたために寒気の影響も弱く、記録的な高温となった。北極海の海水存在日数は、平年よりもかなり少なかった。南極上空では中旬に成層圏突然昇温が観測された。

アジアモンスーン域における対流活動は9月としては1979年以降最も活発となり、月の後半には対流活動活発域の北偏が顕著だった。一方、中・東部太平洋赤道域では対流活動が不活発だった。中旬にはベンガル湾から東南アジア、西部太平洋にかけて対流活動が活発化し、アジアモンスーン域における対流活動活発域の明瞭な北進が見られた。また対流圏下層のアジアモンスーン循環が平年より強かったことに対応して、インド洋からインドネシア付近にかけての高気圧性循環偏差、アラビア半島からアラル海にかけての低気圧性

循環偏差が顕著となった。太平洋赤道域の下層では明瞭な東風偏差、上層では明瞭な西風偏差が2007年6月以降持続しており、ラニーニャ現象時に見られる大気循環の特徴と一致している。

南方振動指数 (SOI) は+0.1となった。

世界の天候

世界の月平均地上気温平年差は、+0.27°Cで、1891年の統計開始以来、8番目に高い値となった。

○モンゴル付近では、暖かい高気圧に覆われることが多く、異常高温・異常少雨となった。

○フィリピンからメラネシア北部では、対流活動が平年より活発で異常多雨となった。

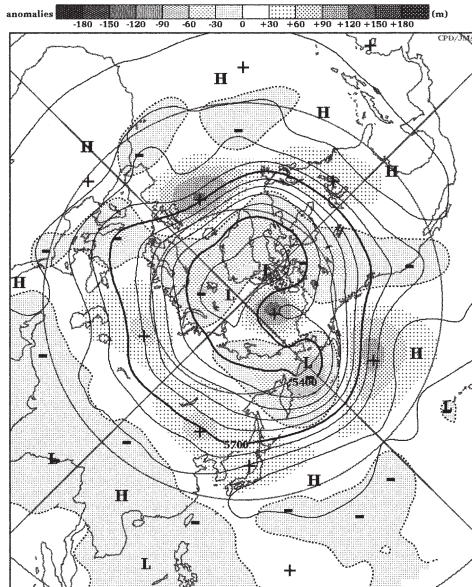
○ヨーロッパでは、上旬と下旬の低気圧の通過によりまとまった雨があり、異常多雨となった。

○米国東部では、亜熱帯高気圧が平年より強く、異常高温・異常少雨となった。

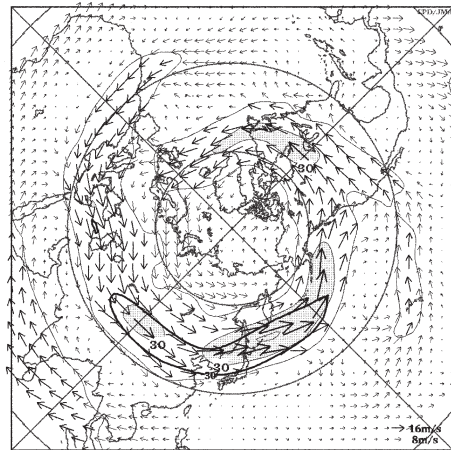
(気象庁地球環境・海洋部気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

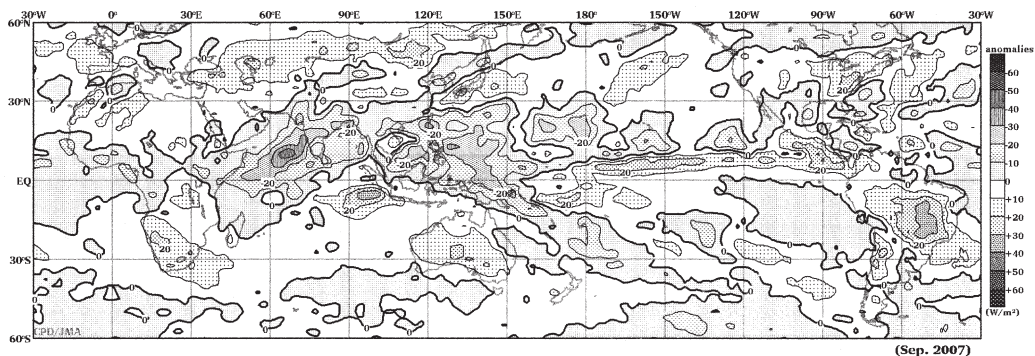
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



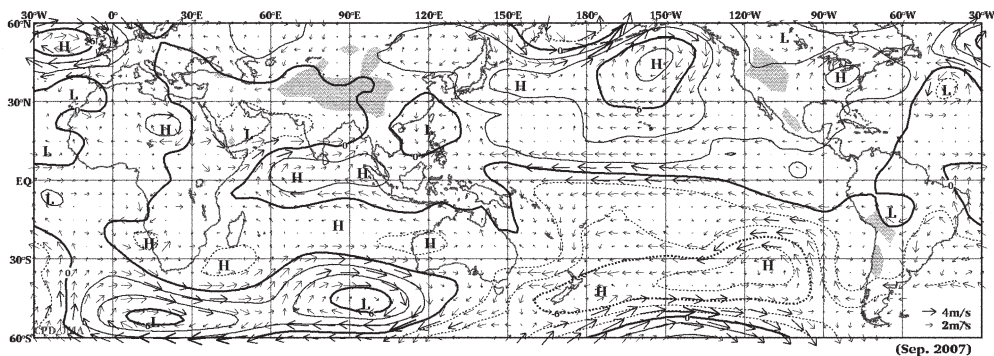
2007年9月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m, 陰影は平年偏差。平年値は1979~2004年のデータから作成。



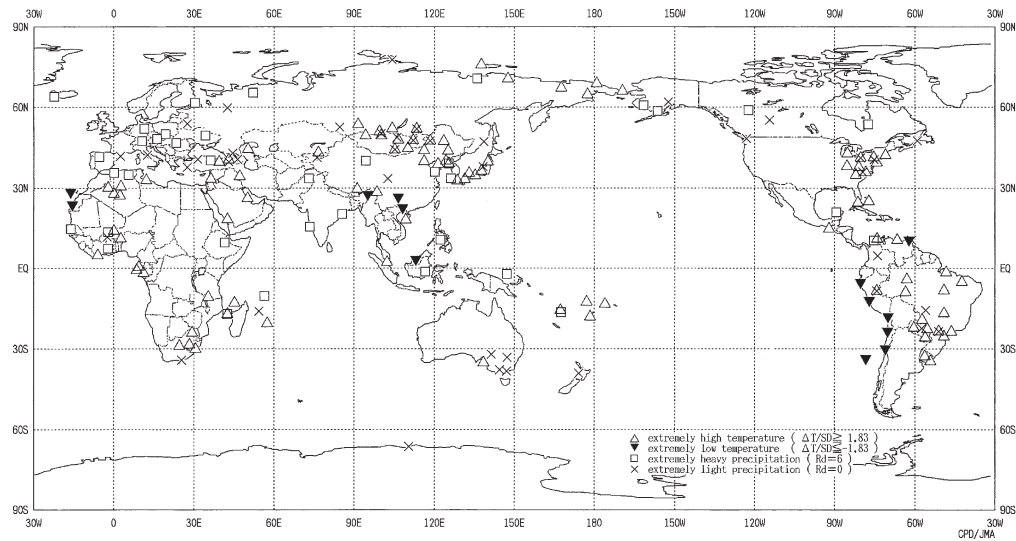
2007年9月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は15 m/s, 陰影部は30 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2007年9月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は 10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA、年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2007年9月の月平均 850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2007年9月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。